



課題4-2 こんな時どうしますか？

平日の午後1時6分（昼休み中）、震度6強の地震が発生しました！

休み時間中の災害発生に備えて、生徒が自ら状況を正確に把握し、適切に判断して行動できる力を身につけさせたい。

◇ 学校及び周辺の被害状況や被害による影響を予測してみましょう。

校舎の中では、天井（天井板、蛍光灯）、壁、柱、棚（配置物）、窓（ガラス）などに注目させ、落下、崩壊の被害を予測させる。校舎のまわりではこのほかに、校舎の損壊、設置物の崩壊、液状化現象による地面（校庭等）・道路の異状、土砂災害などの被害を予測させる。これらの被害が、校舎内から外への避難、帰宅にどのような支障を与えるかを考えさせる。

停電に伴い、先生の指示等が伝わりにくくなる、照明が消え場所によっては暗闇で行動しなければならない、テレビ・ラジオ・パソコンが使えず迅速・正確な情報を得にくくなるといったことが予測され、様々な不安を引き起こす要因となる。また、断水により消火活動への支障、飲み水や手洗用水の確保困難、水洗トイレの使用困難といったことが予測できる。

靴を脱いでいる場合、けがをした場合、火災が発生した場合、廊下・階段の一部が使えない場合など様々な場面を想定し、どのような対応が必要となるかを考えさせる。

どんな落下物や転倒物が考えられますか。落下物や転倒物からどのように身を守りますか。**（自助）**

まず、自分の命を守ることが大切であることを確認させ、身を守る方法を考えさせる。

- ・冷静な状況判断
- ・身を守る迅速な行動（何かで頭を覆う、机の下等に入る、転倒落下の可能性のあるものから離れる等）

地震のショックで動けなくなった友人、けがをした友人がすぐそばにいます。あなたはどうしますか。

（共助）

自分の安全に十分気を配り、友人を安全な場所へ誘導する。

避難場所へ誘導できなければ、先生に友人の居場所やけがの状況を報告し、先生の指示にしたがう。

どうやって安全な場所まで避難しますか。また、そこへ行くまでにどんな困難がありますか。

避難訓練が基本であるが、障害物や避難路の崩壊等の状況に応じ、臨機応変に適切な方法で避難する。けが人等がいることを想定し、他人に気を配ることが必要なことに気づかせる。歩きにくく、余震を恐れての避難になる。

● 災害に強い学校づくりのために、ふだんからどのようなことを決めておいたり、準備しておいたりしたらいいですか？

どこに避難しますか？

必ずしも訓練どおりではなく、状況に応じた対応が必要な場合もあることに気づかせる。

○教室の中

- ・物品の破損、落下、移動を防止する方策。
- ・防災ずきん等の用意。
- ・避難経路の確認。
- ・災害発生時の行動を時系列で確認。
- ・危険と思われる場所の把握。

以上の観点を中心に考えさせる。

○先生がそばにいない時

- ・正確な状況把握。
- ・適切な判断・行動。
- ・自分の状況を知らせる方法。

以上の観点を中心に考えさせる。

○一人の時

- ・先生がそばにいない時と同様。
- ・けがをしたり、閉じ込められたりした場合の対処（防犯ブザー等音がするもの・懐中電灯等を携行する等）。

以上の観点を中心に考えさせる。



課題4-3 あなたの身のまわりには**危険**がいっぱい!

通学路・家・地域に潜む危険を知り、これらを回避する方法を考えることで、災害発生時の恐怖や不安を少しでも減らし、適切な行動がとれる生徒を育てる。

通学路を一人で歩いているときに、大地震が発生しました。

学区の地図を利用し、実際に通学路を確認させる。

あなたの通学路にはどのような危険が潜んでいますか。

通学路の危険を確認することは地震への恐怖感をおおるためではなく、地震の際の対応を考えるために必要であることを理解させる。

- ・ブロック塀や家屋の倒壊
- ・電柱、信号機、樹木の転倒
- ・看板や標識の落下、ガラス破片の飛散
- ・道路の陥没や寸断
- ・火災の発生
- ・交通事故
- ・液状化の発生
- ・エレベーター停止 等

その危険を回避するためには、どのような行動をとるべきですか。

自分の命を守ることを第一に、地震が起こった時に発生する事態を予測し、その対応を考える。

- ・身近なもので、頭を保護する。
 - ・周囲の状況を冷静に観察し、適切な行動を考える。
 - ・倒壊・落下する危険があるものから離れ、身を低くして揺れが収まるのを待つ。
 - ・状況によっては、建物の中に避難する。
 - ・電線の状況に注意し、その切断による事故（感電等）に気をつける。
 - ・エレベーターは、最寄りの階に停止させ降りる。等
- 自他の命を守るためには、地域の人々との助け合いが不可欠であることに気づかせる。

深夜、就寝中に大地震が発生しました。

自分の部屋が安全か、確認させる。

この地震で、どのような被害が予測されますか。

- ・家屋倒壊及びそれによるけが・閉じ込め
- ・家具、テレビ、ピアノ、冷蔵庫、書棚、机などの転倒及びそれによるけが
- ・ガラスの破損・飛散及びそれによるけが
- ・火災発生及びそれによるやけど・けが
- ・液状化現象の発生 等

その被害を最小限にするために、あなたはどうしますか。

被害は、事前の備えで、軽減できる場合が多い。そこで、この課題学習をきっかけに、防災について、家族で話し合う機会を持たせたい。（課題4-4 「家族で話そう防災のこと」との関連。）

- また、就寝中は揺れを実際より大きく感じ、暗闇との相乗作用で恐怖心が高まることを念頭に、対応を考えさせる。
- ・家具等には転倒防止金具や滑り止めをつける。
- ・窓ガラスには飛散防止フィルムを貼りつける。
- ・事前に避難経路が確保できるようにしておく。
- ・寝室には転倒・落下の恐れがあるものをできるだけ置かない。
- ・電気器具、ガス器具は、地震により自動的に停止するものを使う。
- ・懐中電灯の準備。・枕元に衣服、靴を置いておく。
- ・居場所を知らせるためのホイッスル等を身につけておく。
- ・再通電時の火災発生を防ぐため、電気器具のスイッチ切断、ブレーカーの遮断を確実に行う。等

災害は地震だけではありません。

大型の台風や集中豪雨が、あなたの住む地域を襲った場合、どのような被害をもたらすのか考えてみましょう。

自分の住む地域に、危険だと思われる場所がありますか。

住んでいる場所によって被害が異なる。過去の台風や集中豪雨による被害を調べ、自分の住む地域の危険な場所を推測させる。道路の陥没や寸断、交通網のまひは、生活そのものに大きく影響することにも気づかせる。

予測される被害は、どのようなことですか。

過去の被害を参考にして考えさせる。

- ・河川の増水・氾濫
- ・道路や橋の崩壊
- ・海岸近くでは高波
- ・がけ崩れ
- ・樹木の転倒
- ・強風による家屋の倒壊や物の落下
- ・床上・床下浸水
- ・電線の切断
- ・交通機関の寸断

危険な場所を知ることは、自分の身を守るうえで大事なことである。地震と違い、台風などについては、天気予報等で事前に情報を入手できるので、避難するなどの対策を講じることが可能である。



課題4-4 家族で話そう 防災のこと

◎指導のポイント

生徒自身が「家族の防災リーダー」として、実際に家族会議が開けるよう支援したい。そのためには、家庭の協力が大切なので、保護者への啓発も忘れずに行いたい。

家族の防災会議	
家の中の安全	<p>それぞれの部屋の安全対策は充分ですか。出口や逃げ道は確保できていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○家の中の避難場所を決定する。(家の中で一番安全な場所の確認) ○自分の身の守り方を確認する。(昼間・夜間) ○家具や家財道具の転倒防止, ガラスの飛散防止対策を行う。 ○家(建物)の耐震対策を行う。 ○火災を防ぐための対策を行う。(消火器・電気機器・ガス機器・石油機器などの点検及び取扱方法の習熟) ○出口や通路を確保する。(最低2方向, 集合住宅ではベランダを含む) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">「安全」に対する考え方, 経済的なことも関係するので, 家庭によって異なる。</div>
家族の役割分担	<p>大地震が起きた時から避難するまでの家族一人一人の役割は決めてありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○非常用持出袋を持ち出す。(課題4-5「非常用持出袋」編との関連) ○一人で避難することが困難な家族(乳幼児, 高齢者, 病人, 障害のある人)の避難を補助する。 ○火の元を確認し, ブレーカーを遮断する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">だれかが不在の場合もあるので, 様々なケースを想定して話し合わせる大切である。</div>
留守番の時	<p>子どもだけで留守番をしている時はどうしたらよいか決めてありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分や兄弟の安全を確保する。(弟や妹の世話) ○火の元を確認し, ブレーカーを遮断する。 ○非常用持出袋を持ち出す。 ○連絡方法, 避難方法, 避難場所の確認をしておく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">一番不安や恐怖を感じる場面だが, 自分で的確に判断し, 迅速に行動する力が必要となる。ふだんからの話し合いや訓練を生かすこと, 近所の人の助けを借りることが大切である。</div>
安否の確認	<p>家族が一緒にいない時, 連絡方法は決めてありますか。</p> <p>家族が, ばらばらに被災することを想定して考えさせる。災害後しばらくは災害用伝言ダイヤルや災害用伝言板サービスを含め, 電話が使えない可能性があることを知ったうえで考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○まずは直接集まって, 安否を確認することを考える。 ○家から離れた場所で被災したらどうするかを考える。 ○子どもが学校にいる場合の引き渡し方法を確認する。 ○災害用伝言ダイヤルや災害用伝言板サービスをどのように使うか, 確認する。(ポケット版防災冊子を参照) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">自分が帰宅困難者になることを想定し, どう対処したらよいかを考えさせる。</div>
避難経路と場所	<p>避難場所は分かっていますか。また家から避難場所までの避難経路は分かっていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○避難場所・避難所はどこにするのか, そこまでの道順や通る道は安全かどうかについて, 学区や地域の地図を渡し, 確認させる。 ○集合住宅の場合, 逃げ道は確保されているかなど, 経路の確認をさせる。 ○学校にいる場合, そうでない場合について考えさせる。 ○実際に避難場所・避難所まで歩いてみることの大切さに気づかせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">避難場所・避難所までの道で, 被害を受ける場合もある。日常生活の中で, 災害に強いかどうかという視点で歩いてみる大切である。</div>

決めたことは、「防災カード」に書いて、掲示したり、各自が携帯したりするようにしましょう。



課題 4-5 非常用持出袋の中身を考えよう

この中から非常用持出袋の中に5個入れられるとしたら何を持っていきますか？考えてみましょう。

持っていくものが決まったら「なぜそれを持っていくのか」を考えながら話し合ってみましょう。



着替え	毛布	カップめん	ラップフィルム	飲料水	紙皿
懐中電灯	カイロ	レインコート	タオル	レジャーシート	ラジオ
ビニール袋	軍手	ホイッスル	ライター	電池	携帯電話
マスク	カンパン	ろうそく	ライター	ヘルメット	常備薬
はさみ	紙コップ	くつ	お金	ばんそうこう	その他

◎指導のポイント

まずは生徒に「非常用持出袋の中身」と「非常用備蓄品」は違うということを理解させたい。非常用持出袋は、地震発生直後に持っていくものである。非常用備蓄品は避難所などでの生活を余儀なくされた時に必要なものを指す。この違いに着目して道具を選んでいくと次のように分けることができる。（下に記した分類はあくまでも一例であり、「地震が起きた直後に必要である物を非常用持出袋に入れる」という観点で考えられることが大切である。）

A…非常用持出袋に入れて持ち出すもの

飲料水・懐中電灯・レインコート・タオル・ティッシュペーパー・ラジオ・軍手・ホイッスル・電池・マスク・カンパン・常備薬・お金など

B…一時避難時に持ち出すもの(非常用備蓄品)

着替え・毛布・カップめん・ラップフィルム・飲料水・紙皿・カイロ・ビニール袋・レジャーシート・ろうそく・ライター・はさみ・紙コップ・ばんそうこうなど

C…袋には入れず持ち出すもの

携帯電話・ヘルメット・くつなど

さらに、Aに該当するもので、例えば水はどれくらい持っていくのか（一般的に1日一人3ℓ必要と言われるがそこまで袋には入れられない）、お金はどれくらい持っていくのか（公衆電話を使用することを考えると10円玉が必要になる）など、具体的にイメージさせることで、様々な問題点に気づき、生徒たちの考えは深まる。

各自が選んだものを実際に袋に詰めさせ、その大きさや重さを実感させることも有効な指導になる。

◎授業の流れ（グループ学習）

- ①各自で非常用持出袋の中身を考える。
- ②グループ内のメンバーで、各自が選んだ理由をもとに話し合う。
- ③話し合いの結果から、自分たちのグループの非常用持出袋の中身を発表する。

救援物資の量は限られている。ふだんから各家庭で非常用持出袋や非常用備蓄品の用意をすることが大切である。また、用意をするだけでなく、置き場所も考えておきたい。家の奥にしまっている場合は、家がつぶれ、取り出せない可能性がある。玄関に置くなどして、すぐに取り出せる工夫も必要である。避難所では、行政の支援が行われるまでの間、各家庭から持ち寄った非常用持出袋や非常用備蓄品を使って生活することになる。この授業を通じて、ふだんからの準備が必要であることを理解させたい。



課題4-6 災害後、地域の復興までの長い道のり

1 大きく変わる災害後の暮らし

大規模地震災害が発生した後の生活を想像してみましょう。

○ライフラインが切断されるとどんなことが起こるでしょうか。
ライフライン切断に対し、事前準備、対策等を考えさせる。

- ・断水（消火活動、飲料水・調理用水、水洗トイレ・風呂・シャワー等）
- ・停電（家電製品、信号機、病院の医療器具、銀行のATM等）
- ・情報網（電話・携帯電話、各種のオンラインシステム等）
- ・交通網（物流、輸送、緊急車両、帰宅困難等）

これらへの影響について考えさせる。

○避難所生活とはどんな生活でしょうか。
狭い空間に多くの被災者が集まり、プライバシーも十分に守られない中で生活をしながらはならない。そのことによって、どのような不自由さが生じるのか考えさせたい。

「2 避難所での過ごし方」につながるよう自分が不自由と感じるであろうことを中心にあげさせる。避難所生活が、長期にわたる場合もあることにも気づかせる。

2 避難所での過ごし方

避難所では多くの被災者が集まって不自由な生活を送ることになる。心得ておくことはどんなことでしょうか。

○基本的なルールとマナー
自分が不自由と感じることをもとに、避難所生活で注意すべき点を考えさせる。

- ・まわりの人に迷惑をかけない
- ・集団生活のルールやマナーを守る
- ・他の人のプライバシーを大切にする
- ・健康のために、規則正しい生活をする
- ・お年寄りや体の不自由な人に親切にする 等

お互いに相手を思いやる行動が、結果として、自分自身の生活を守ることにつながることに気づかせる。

○夏場の注意
夏特有の、避難所生活の注意点に気づかせる。
食中毒、熱中症、虫さされ、汗の始末等

○冬場の注意
冬特有の、避難所生活の注意点に気づかせる。
寒さ対策、風邪などの感染症対策

予防策が必要であるが、個人でできること、避難所全体で取り組むべきことに分けて考えさせる。
非常用持出袋の中身、非常用備蓄品は、季節に合わせて検討する必要があることにも気づかせる。
(課題4-5「非常用持出袋」編との関連)

3 災害直後から地域復興への道は始まっています

不自由な生活に不満を言っても始まりません。自分たちの生活をいち早く取り戻すためにも、前向きな気持ちで歩いていきましょう。

○地域復興に向けて、わたしたちにできることは？
(地域の一員、家族の一員として、そして自分のために)

被災後、家族と出会い、避難生活も一段落したら、自分たちにできることを見つけ、前向きな気持ちで取り組んでいくことが大切である。中学生の力は、家族や地域の役に立ち、また、勇気づけることに気づかせたい。

- ・避難所生活で、地域の一員としてできること
- ・わが家に戻って生活を始めるために、家族の一員としてできること

長く続く復興への道を歩いていくためには、精神面が大きく影響する。現実を悲観するのではなく、前向きな気持ちで力を合わせていこうという子どもたちの取り組みは、多くの大人たちに勇気を与えることを強調したい。また、学校へ行って一生懸命勉強することが、自分たちの通常の生活を取り戻すための第一歩ということにも気づかせたい。



<この指導の前に準備すること>

○防災教材「クロスロード」

※千葉

(043-223-(S-%) で貸し出しをしてい

<授業展開例> (全学年実施)

第〇学年 学級活動学習指導案

1 題材名 その時あなたは どうしますか？ (クロスロード)

2 題材の目標

(1) 災害時の対応を自らの問題として考えようとするができる。

(2) 災害時の課題に対し、他者の考えも取り入れながら、自らの考えをもつことができる。

3 題材の評価

(1) 他者の意見を聞き、尊重し合意形成することができる。

(2) 自分の意見を、根拠をもって伝えることができる。

4 本時の活動

課題に対し、自分の考えをもち判断するとともに、他者の考えも取り入れ災害について積極的に考えることができる。

5 本時の展開

時配	学習内容・学習活動	支援 (○), 留意点 (●), 評価 (☆)
導入 (10分)	1 「ちば・ふるさとの学び」 P 6 7 「2 阪神・淡路大震災に学ぶ」を読み、地震災害時の状況を知る。	・災害時は、揺れによる被害に加え、避難所への避難など、さまざまな状況が発生することに気付かせる。(●)
展開 (30分)	2 本時の課題を知る。	
	学習課題 災害時の行動を、クロスロードを使って考えよう (自助・共助)	
	クロスロードについて知り、グループ作りをする。 ・「クロスロード」の概要 ・ゲームの進め方 ・「YES」「NO」カードを配る ・座布団カードを適宜配る	・クロスロードのゲームの仕方を理解させ、男女別グループ作りをする。(○)
	【グループ】 ・男女混合5人組 (または、それ以上の奇数人数グループ) 【ゲームの進め方】 ①問題カードを、代表生徒 (または指導者) が読み上げる。問題の答えは、「YES」「NO」のどちらかとする。 ②問題に対し、自分ならどう判断するかを考え、決まったカードを裏返しにして出す。 ③グループ全員が出し終わったら、一斉にカードを表にする。 ④多数派になった場合は「青座布団」を1枚もらえる。一人だけ違うカードを出した場合、「金座布団」がもらえる。 ⑤多数派、もしくは「金座布団」をもらった人から、その理由を順に話す。 ⑥友達の意見は絶対否定しないこと。	

	<p>3 クロスロードゲームをとおし、災害時について積極的に考える。</p>	<p>・状況に応じ、グループの話の内容を全体に伝えるなどゲームが活発になるようにする (○)</p>
<p>まとめ (10分)</p>	<p>4 ワークシートに振り返りを記入し、今後の防災について考えをもつ。</p>	<p>・課題に対し、自分なりの考えを持ち他者に伝えるとともに、他者の考えを受け入れることができた。評価 (☆) ・ワークシートに振り返りを記入し、災害時の判断の重要性と、災害に対する備えの必要性を理解できた。(☆)</p>

【課題例 1】
○あなたは海辺の集落の住民です
地震による津波が最短 10 分でくるとされる集落に住んでいる。今地震発生。早速避難を始めるが、近所の一人暮らしのおばあさんが気になる。まず、おばあさんを見に行く？ YES：見に行く NO：見に行かない

【課題例 2】
○あなたは市民です
大きな地震のため、避難所（小学校体育館）に避難しなければならない。しかし、家族同然の飼い犬“もも”（ゴールデンリトリーバー，メス 3 歳）がいる。一緒に避難所に連れて行く？ YES：連れて行く NO：置いていく

【課題例 3】
○あなたは市民
非常袋を持って避難所に避難してきました。しかし周りの人は、水も食料もありません。空腹なあなたは、その人たちの前で、水や食料が入った非常袋を開けられる？ YES：開けられる NO：開けられない

【課題例 4】
○あなたは市民
大地震で我が家は半壊状態。避難してきた避難所では風邪が大流行。あなたは、避難所を出て家に戻る？ YES：戻る NO：戻らない

【課題例 5】
○あなたは避難所運営担当者
避難所に 600 人が避難してきています。避難所におにぎりが 400 個届きました。あなたは、おにぎりを配る？ YES：配る NO：配らない

【課題例 6】
○あなたは避難所に来ているボランティアのリーダー
普段は一生懸命作業している大学生のボランティア。作業をしている時間にいなかったもので、体育館裏に行ってみると、女子ボランティアと楽しそうに話をしている。あなたは注意する？ YES：注意する NO：注意しない

課題4-2-3 津波災害に備えて

<この指導の前に準備すること>

- 防災教材「クロスロード」を学習し、災害時における判断の大切さを体験しておく。
- 津波動画資料 「津波から生き延びるために知る・行動する」(DVD) 消防科学総合センター
http://www.fdma.go.jp/html/life/sinsai_taisaku/sinsai22_pv.html からダウンロード可
 ※または東日本大震災時の津波動画
- 紙芝居資料「津波だ！いなむらの火を消すな」をダウンロードし、印刷またはプロジェクターで投影できるようにしておく。

<授業展開例> (全学年実施)

第〇学年 学級活動学習指導案

1 題材名 いなむらの火

2 題材の目標

- (1) 津波災害の特徴から、自らも災害に備えようとすることができる。
- (2) 津波災害の特徴を理解し、命を守るための判断について考えることができる。

3 題材の評価

地域の一員としての自覚と責任をもち、根拠(理由)を示して自己の考えや思いを発表するとともに、互いの意見を尊重しながら考え、判断し、協力している。

4 本時の活動

- ・津波災害について理解し、災害に対し積極的に備えようとするすることができる。

5 本時の展開

時配	学習内容・学習活動	支援(○), 留意点(●), 評価(☆)
導入 (10分)	1 5人組になり、防災ゲーム「クロスロード」を行い、災害時の判断の難しさを味わう。	・災害時、特に津波発生時に判断を迫られる場面のクロスロードカードも交え、災害時の判断の難しさに触れさせる。(●)
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>【クロスロードカード】 「あなたは海辺の集落の住民です。地震による津波が最短10分でくるとされる集落に住んでいます。今地震発生しました。早速避難を始めるが、近所の一人暮らしのおばあさんが気になります。まず、おばあさんを見に行きますか？」</p> </div>	
展開 (25分)	2 津波災害による被災の様子を収録した動画を視聴し、津波による災害の特徴に気付く。 ・津波の速度は速い。 ・陸地近くで波の高さが高くなる。 ・津波はかなりの高さまで駆け上がる。 ・長時間続く、押し波と引き波がある。	・DVD「津波から生き延びるために知る・行動する」の導入部または、東日本大震災時の津波動画を視聴させ、感想を話し合う。(●)
	3 教材「いなむらの火」の教材の概要を知り、場面①～③を音読し、自分ならどう判断し、行動するか考える。	・主人公「儀兵衛」のモデルとなった浜口梧陵(儀兵衛)は、銚子市とゆかりのある人物であることを知らせる。

・地震の様子から津波がくることを知ったこと、このままにはしておけないと判断したことを確認する。

学習課題 津波が来た時どう判断し行動すればよいのだろう。(自助・共助)

自分が「儀兵衛」だったらこの後、
 どういう行動をとるか考え、グループ
 で話し合う。

4 場面④～⑩を音読し、「儀兵衛」の判
 断・行動について考える。

「3」と同グループで、なぜ(何の
 ために)火をつけたのか、話し合いグ
 ループの意見をまとめ発表し合う。

- ・大きい音を出せないで、村人を避難させるために火をつけた。
- ・宵祭りの支度に心を取られている村人に気付かせるためには、大切な稲束を燃やしても仕方がないと考えた。
- ・判断に迷いがなく、儀兵衛は津波のことをよく知っていたと思う。

意見発表の後、⑪～⑮を読み、津波後の様子を知る。

- ・導入で行った「クロスロード」を想起させ、災害時の判断の重要性を確認し、自分の考えをワークシートに記入させる。(●)
- ・津波が来ることに気付いた場面について、自分の考えをもち、根拠をもとに相手に伝えることができたか。(☆)

・大切な稲束ではあるが、津波の速さを考えさせるとともに、村の人の命を守るために今できる最善の方法であると判断したことに気付かせる。

・自助・共助の視点に着目して考えることができたか。(☆)

まとめ
 (15分)

5 津波の時にとるべき行動について考
 える。

- ・津波は速度が速いので、地震が発生したら早く逃げる。
- ・陸地に来ると波が高くなるので、高い所に逃げる。

・導入時の動画資料やいなむらの火の教材から津波発生時にとるべき行動を考えさせる。

6 釜石市の防災教育「避難三原則」と
 自分の住まい等の海拔を調べ、取るべ
 き行動を再度考える。

- ・ 想定にとられるな
- ・ 最善を尽くせ
- ・ 率先し避難せよ

・東日本大震災における釜石市の事例をもとに「避難三原則」の意味を理解させるとともに、自宅や学校等の海拔から、再度津波の際にとるべき行動を考えさせる。

7 学習の振り返りをする。

・津波発生時の判断について考え、話し合うことができたか。(☆)



<この指導の前に準備すること>

- 千葉県から各学校に配布されている「ポケット版防災冊子」*1と防災教育DVD「『いのち』を守る!!そして助け合う心を!!～いつ起こるかかわからない地震に備えて～」(約30分)を見ておく。
- 非常用持出袋の中身の30のグッズをフラッシュカードに書いて、裏にマグネットシートを貼り、黒板上で自由に動かせるようにしておくとうりやすい。時間がない場合は、グループで書かせてもよい。

<授業展開例> (全学年で展開可能)

第〇学年 学級活動学習指導案

1 題材名 非常用持出袋の中身を考えよう

2 題材の目標

- (1) 自分の家の非常用持出袋の中身を考えることができる。
- (2) 家に戻って非常用持出袋を用意しようとする意欲を持つ。

3 題材の評価

自宅で非常用持出袋を用意することができる。

4 本時の活動

- (1) 非常用持出袋の必要性を理解し、非常用持出袋の中身をグループで考える。
- (2) 防災教育DVDを見て、実際の被災者の体験談を聞き、「備えあれば憂いなし」という意識を高める。

5 本時の展開

時配	学習内容・学習活動	支援 (○), 留意点 (●), 評価 (☆)
導入 (5分)	1 テキストを読んで、災害が起きたことを想定し、「備えあれば憂いなし」ということを意識する。 2 自分の家の非常用持出袋には何が入っているのか発表する。 3 自分の部屋に置いてある人は、何が入っているかを発表する。	・日ごろから被災したことを想定し、イメージトレーニングすることが大切であることを強調する。(●) ・自宅で用意しているか知らない生徒もいるので、帰宅したら確かめるようにさせる。(●) ・用意してある家庭の生徒に紹介してもらう。 ・意識の高い生徒がいたら、他にも家庭での防災対策について話してもらう。(●)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 学習課題 非常用持出袋の中身を考えよう。 </div>		

<p>展開</p> <p>(40分)</p>	<p>4 「非常用持出袋」と「非常用備蓄品」は違うことを理解する。</p> <p>・ワークシートに書き込みながらグループで話し合いを進めていく。</p> <p><グループ学習></p> <p>①まずは自分で持っていくものを選ぶ。</p> <p>②グループ内で発表し合い、共通していたものを書き出す。</p> <p>③グループ内でバラバラだったものを書き出す。</p> <p>④話し合いの結果から自分たちのグループの非常用持出袋の中身を考える。</p> <p>⑤それぞれのグループが発表する。</p> <p>5 防災教育DVDを見せ、被災者の話や、実際に非常用持出袋についての話を聞かせ、自分たちの考えと比較する。</p> <p>6 話し合いやDVDを見た感想を書く。</p>	<p>・「非常用持出袋」は地震直後に持っていく物で、「非常用備蓄品」は避難所などで生活しなければならない時に必要なもの、ということを説明したうえで考えさせる。(●)</p> <p>4～6人のグループをつくらせる。</p> <p>・司会者を決めさせる。</p> <p>・司会が進行し、全員の意見を聞けるように指名したり、順番で意見を出させたりする。</p> <p>・発表する時に理由も一緒に言うようにさせる。発表している間は静かに聞くようにさせる。</p> <p>・紙に書かせて掲示発表させるか、フラッシュカードを移動させて自分たちのグループの考えを理由も一緒に発表させる。(●)</p> <p>・DVDを見ながら、阪神・淡路大震災の被災者の話や同じ中学生の防災についての考えを聞くことにより、人ごとではないということを意識させたい。(●)</p>
<p>まとめ</p> <p>(5分)</p>	<p>7 課題4-4について家族で話し合うことを確認する。</p>	<p>・自己評価と相互評価を行わせる。</p> <p>・積極的に話し合いに参加できたか。(☆)</p> <p>・非常用持出袋の必要性和中身について分かったか。(☆)</p> <p>・家庭によって非常用持出袋の中身は工夫してよいことを確認させる。(●)</p> <p>・袋の準備や保管場所、だれが持ち出すのかなど、家族で話し合う必要があることを認識させ、自分が家族の防災リーダーとなって会議を開き、ワークシートの内容を話し合ってくることを宿題にする。</p>

<関連して>

その他の資料として千葉県防災教育資料「備えあれば憂いなし」*2 が配付されているので再度内容を確認しておく。

「ポケット版防災冊子」(千葉県教育委員会ホームページ「ちば・ふるさとの学び」本文のサイトに掲載)を印刷及び配付し、常に身につけておくように指導する。

災害用伝言ダイヤルサービス等を一度家族で練習しておくように指導する。

*1 URL : http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/gakuho/pocket_seito.pdf

*2 URL : <http://www.pref.chiba.ig.jp/kyouiku/gakuho/bousai.pdf>

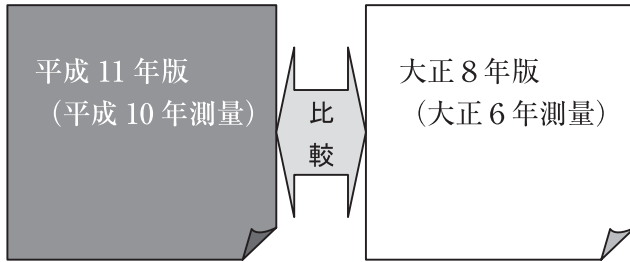


地形図から考える防災

テキストに掲載されている2枚の地形図は、大正8年に陸軍測量部、平成11年に国土交通省国土地理院がそれぞれ発行した同じ場所(市川市～船橋市)のものである。この2枚の活用例を以下に提示する。

1 地形図を比較する

(1) 2枚の違い(大づかみに)に気づかせる。



・全体の色の違い(平成11年版の方が黒く見える。) →色の違いは、人が居住する地域が広がったことを示している。(海岸線の位置の違いや変わっていないものにも気づかせる)

(2) 大きな地形や構造物を確認させる。

・2つの地図の左上から中央下に蛇行して流れる川には、江戸川、旧江戸川、江戸川放水路があることを確認させる。両図面の違いを把握させ、どうしてそうなっているのかを考えさせる。

・大正8年版の地形図の左上と右下を結ぶ鉄道と道路を確認させる。同じ鉄道と道路が平成11年版にもあるのを確認させる。さらに、鉄道や幹線道路が増えていることを把握させる。新たな鉄道や幹線道路の開通はいつごろのことかを把握させる。

(集落と鉄道との関係にも気づかせる)

(3) 海岸線の位置の違いを確認させる。

・これは埋め立てによるものである。いつごろから始まったことかを把握させる。

(4) 大正8年版の地形図の田んぼや塩田(江戸川の東側のみ)に色をつけさせる。

・鉄道、道路の南側(海側)は全域に、北側は鹿の角のような形(樹枝状)に広がっていることが分かる。

(5) 平成11年版の地形図を見て、海岸線、川、道路、鉄道、市町村役場、学校、神社仏閣の位置を確認し、大正8年版の地形図に書き込ませる。

(6) 上記(5)の各場所の地名の異同や人が住んでいたかどうかを確認させる。また、人が住んでいなかった場所ならば、どうしてかを考えさせる。

2 地形図の比較から分かること

《分析結果》

(1) 色をつけた地域は、田んぼや塩田として活用されていた。粘土や緩い砂の地盤で、地震の時には、周辺の場所より揺れやすい地域である。

(2) 色をつけた地域で、鉄道、道路の北側の鹿の角のような地形は、谷津とか谷津田と呼ばれている。約6000年前の縄文時代に海面が今より数m高く、川に軟らかい粘土などが堆積した。田んぼにはちょうど良い地盤だった。

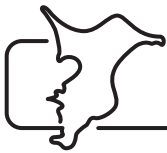
(3) 色をつけた揺れやすい地域に人口が集中しているが、この地域で地震被害を少なくするためには、家の耐震化、家具の固定などが必要となる。特に、鉄道より南の地域は、昔の海岸で液状化の可能性も高くなる。

(4) 谷津や谷津田の近くで、等高線が密なところは、急な斜面で地震や大雨の時に斜面崩壊の可能性はある。

《補足》

◎上記結果は、防災地図に現れている。

◎他の地域についても、同様な学習が可能である。環境、地域の歴史・文学など様々な観点からの学習も可能である。



この手記は、テキスト74ページに掲載した「第1巻『被災した私たちの記録』：天国へ行ったのんちゃん」の筆者、小西眞希子さんが書いたものです。

第10巻「阪神大震災から10年 未来の被災者へのメッセージ」
(阪神大震災を記録しつづける会 震災体験手記集から転載)

娘の記憶を残したい

小西 眞希子 四十五歳 主婦 灘区

あの地震で私はかけがえのない五歳の長女希（のぞみ）を亡くしました。当初は彼女の死を受け止められず、胸がしめつけられ、助けてやれなかった自分を責め続けました。生きている事が本当につらい日々でした。

そんな時「震災で子供を亡くした親の集い」の存在を知り、すがるような思いで足を運びました。月に一度、子供を亡くした親たちが集まり、つらい気持ちや、亡くなった子供たちの事を話します。人目をはばからず泣ける場所でした。

そんなとき「えらいね、私ならとても生きていけないわ」と人に言われました。「私は生きていいのだろうか。なぜ生きているのだろうか」と考えさせられました。言った人も「頑張ったね」という意味で言ってくれた事はわかっているのに、素直に聞く心の余裕もありませんでした。

希が生きていたらと考えると、幼稚園を卒園する頃、小学校の入学式を迎える頃、母の日、父の日、誕生日、と節目、節目が本当につらく、そんな時は家の中でじっと一日が過ぎるのを待ちました。そんな事が何年も続きました。

主人は神戸に、私は下の娘と実家でという生活が地震の年の夏まで続きました。私が両親やまわりの人の温かさにつつまれて生活していた頃、主人は神戸の地で悲しみとつらさの中で生活していました。今でもその溝をうめることができません。

秋に仮設住宅で三人の生活ができるようになり、年末には復興住宅へ移りました。そして地震から四年後の春、希と暮らした町に帰ってきました。

そこには「のんちゃんママ」と呼んでくれる人がいました。大きくなった希の友達がいました。そしてその中に希が生きていました。

五歳になった下の娘の手をひいて、希と歩いた道を歩きました。ゆがんだ道も、落ちた高架も、「夢だったのだろうか」と思うほどきれいに直っていました。

二階建が並んでいた町は三階建てが建ち並び、はじめは圧迫感さえ感じました。春にはきれいな花をつけていた大きな桜の木はなくなっていました。

今では、その町並みにもすっかり慣れ、五年生になった下の娘は、希が通うはずだった小学校に毎日

元気よく通っています。姉思いの娘は何かあると必ず仏壇に手を合わせて希と話をしています。一月十七日にもとされるローソクの灯りを「命の温かさ」と感じる娘に育ちました。どこに行くのも「お姉ちゃんと一緒。私達は四人家族だから」と言います。

彼女の成長の中に必ず希がいます。私には何よりうれしい事です。小さい頃から、あなたの笑顔に支え続けてもらいました。本当にありがとう。

この十年いろいろな人との出会いがありました。同じように家族を亡くされた大勢の方々、希の絵を描いてくださった画家の方、取材を通して知り合った記者の方、震災後暮らした所で知り合った人達。希が会わせてくれた人たちです。

「おかあさん頑張れ」と言ってくれているのかもしれない。二人の娘に支えられ、出会いを大切に、これからも「家族四人」でがんばっていこうと思っています。

今神戸は十年目に向かって、いろいろな活動をしようとしています。けれど、どれだけの人がそのことを知り、参加しようとしているのでしょうか。

娘の通う学校もほとんどが地震の後に生まれた子供達になりました。区画整理が進み、大きなマンションが建ち並び、町には新しい住人がふえ、地震は遠いものになってきています。

私達家族は今「一・一七希望の灯り」というNPOの活動に参加しています。参加されている方は、身内を亡くされた方が多いのですが、他府県から参加される方も少なくありません。他府県の学校で地震の事を勉強して、一月十七日に全員で折った千羽鶴を届けてくださる先生や生徒さんもいます。本当にうれしく思います。

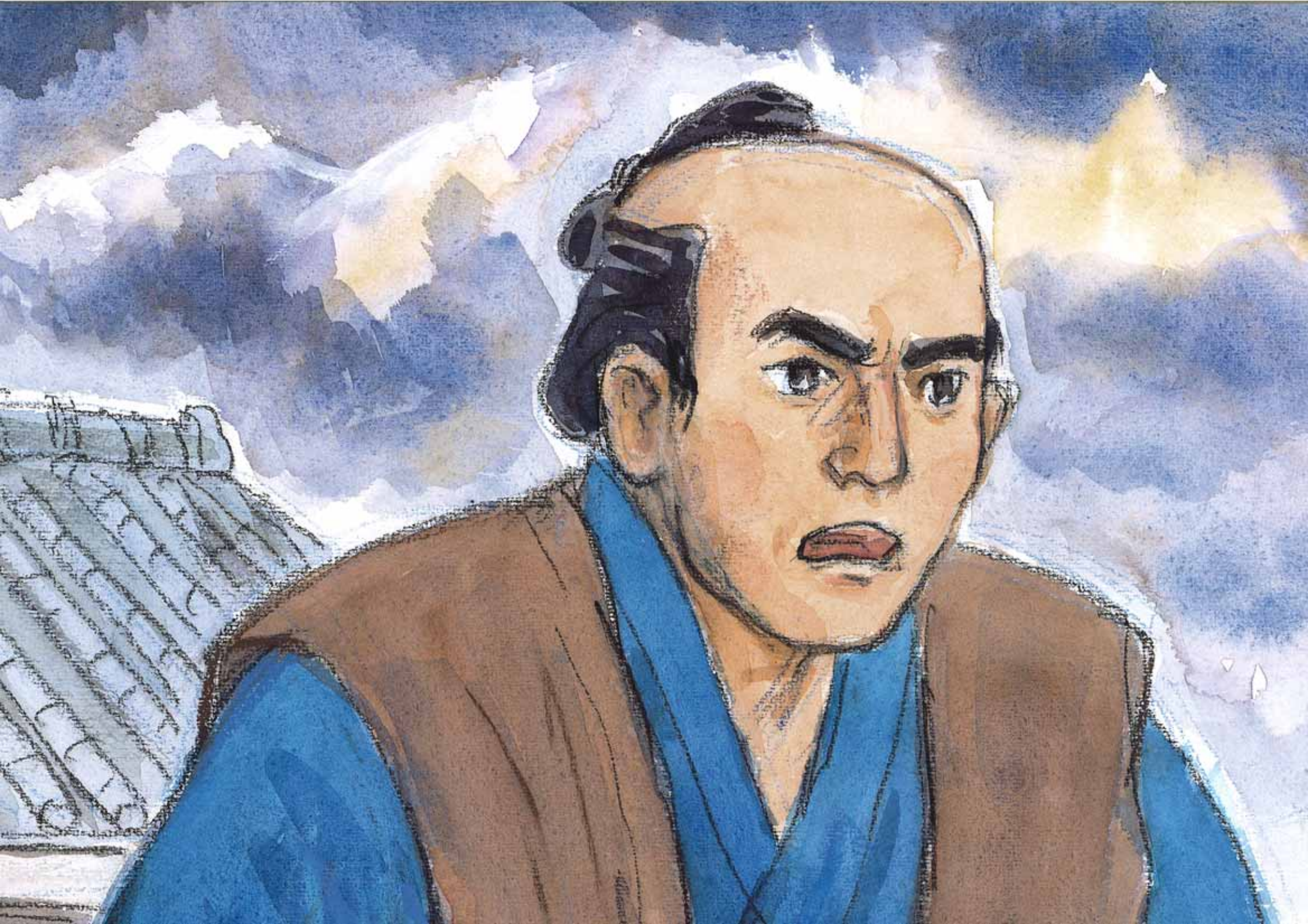
亡くなった娘たちの事を忘れないでほしい。特に地震を知らない子供達には、大きな地震があった事、その地震で多くの人が亡くなった事、その一人ひとりに家族があり、それぞれがつらい悲しい思いをした事、地震で大変だったけど、大勢の人の思いやりややさしさにあふれていた事を知ってほしい。

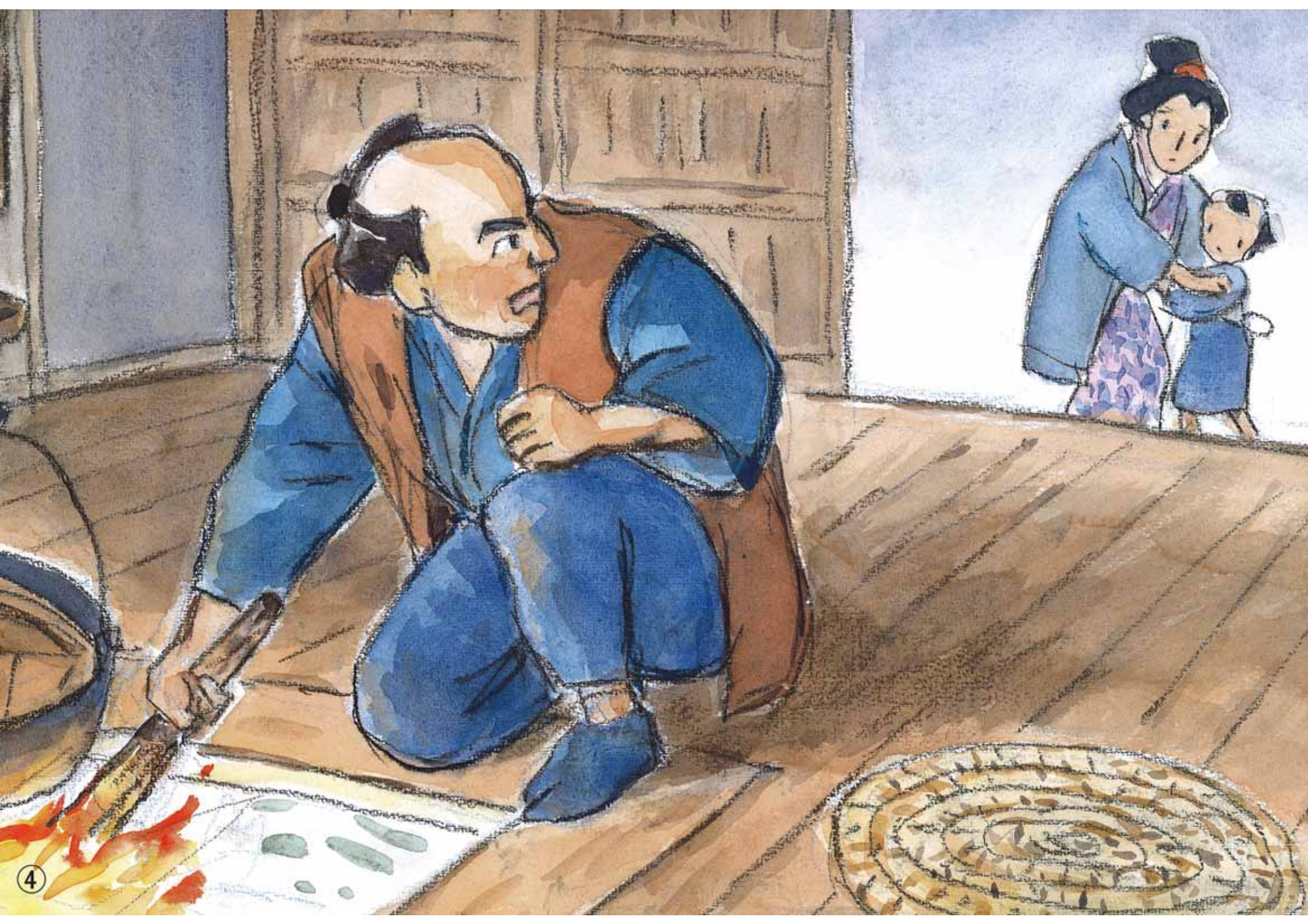
地震を風化させないでほしい。十年で終わりではありません。十年目を前にして改めてそう思います。そのためにできる事を、少しずつ頑張っていきます。

津波だ! いなむらの火をけすな

脚本／桜井信夫 画／藤本四郎











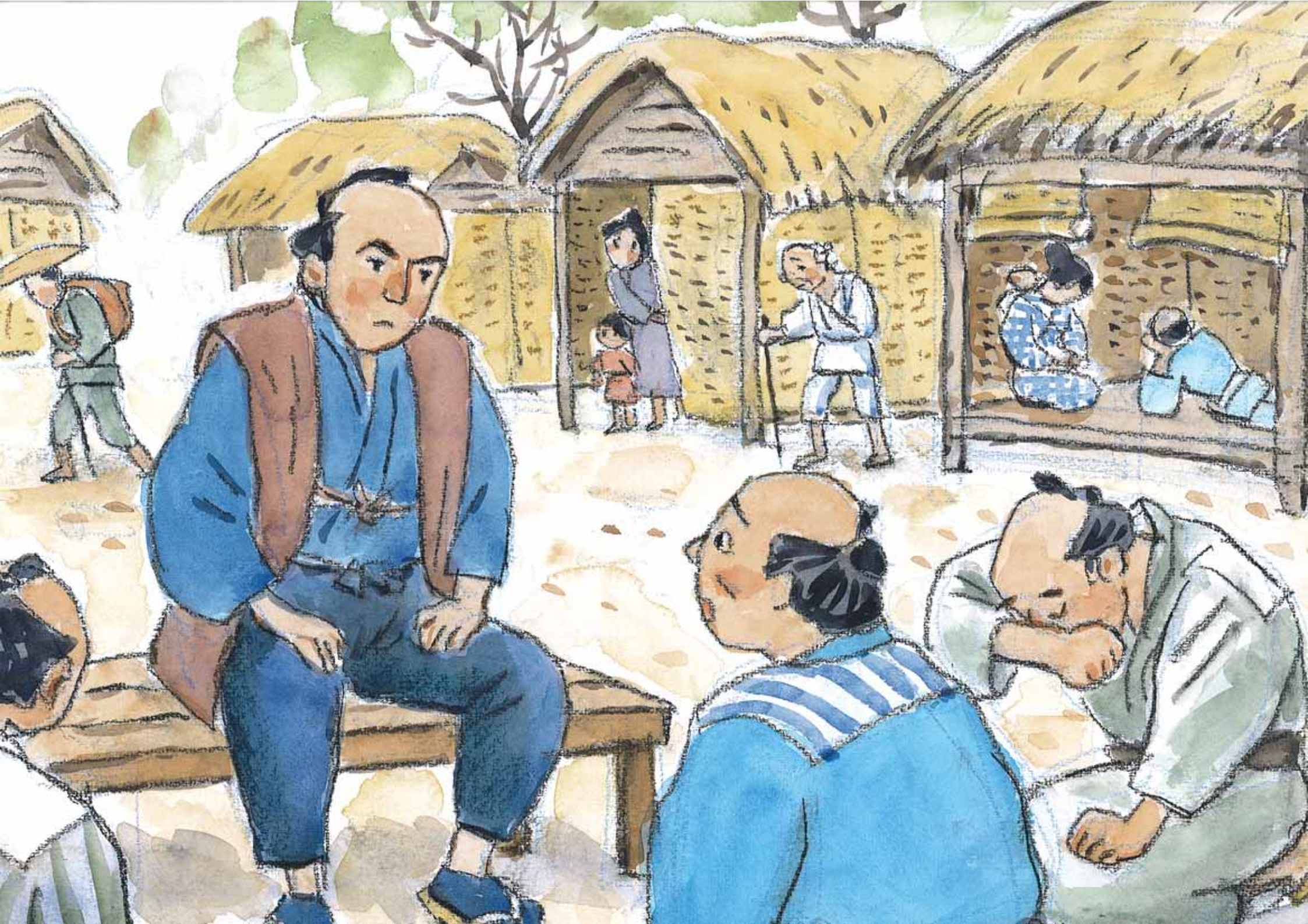


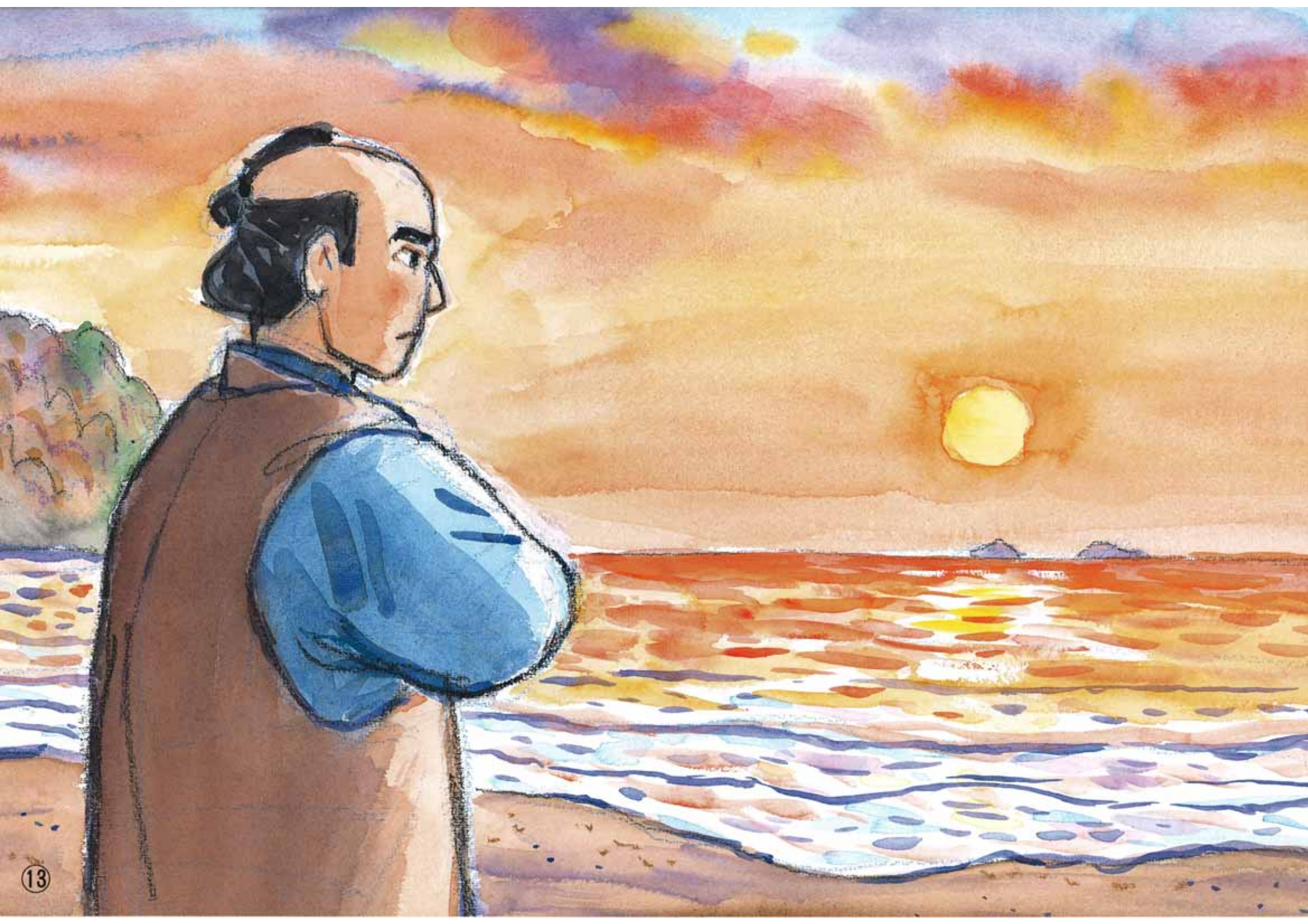
















つなみまつり





津波だ！いなむらの火をけすな

①

脚本
画

桜井信夫
藤本四郎

海辺の村です。

それは、江戸時代の末のこと、十一月のはじめ、ある日の夕方でした。

紀州和歌山の広村では、秋の取り入れが
終わり、田んぼには、いくつもの
いなむらが、ならんでいました。

村人① 「米がたくさん取れたし、いいわらも

残ったし、ありがたい、ありがたい。」

村人たちは、こういって、喜びました。

かり取ったあとの、いねのわらは、

大切な使い道があつて、たばにして、

高く積み上げておきます。これが、

「いなむら」です。

そして村人たちは、そろそろ、

冬の準備にとりかかっています。

(少しの間)

―ぬきながら―

―ごおーつ

演出ノート

十一月のはじめ
旧暦の十一月
五日。現在の
十二月二十四
日にあたる。
紀州和歌山の広村
現在の和歌山
県広川町。

地鳴りの音



②

地鳴りがして、大地が、家が、はげしく
ゆれ動いたのです。

―上下左右に画面をゆすりながら―

村人① 「おおっ、地震だ！ 大地震だ！」

村人たちは、家の外にとび出しました。

子ども① 「きやーっ。」

子ども② 「こわいよう。」

子どもたちは、親にしがみつきました。

(少しの間)

かべがくずれ、かたむいた家から、

けむりのように、ほこりがまい上がりました。

―さつとぬく―

演出ノート

地震のようす

驚きながら

脚本・桜井信夫 (さくらのぶお)

1931年、東京に生まれる。国学院大学文学部卒業。
日本児童文芸家協会、日本民話の会会員。

画・藤本四郎 (ふじもとしろ)

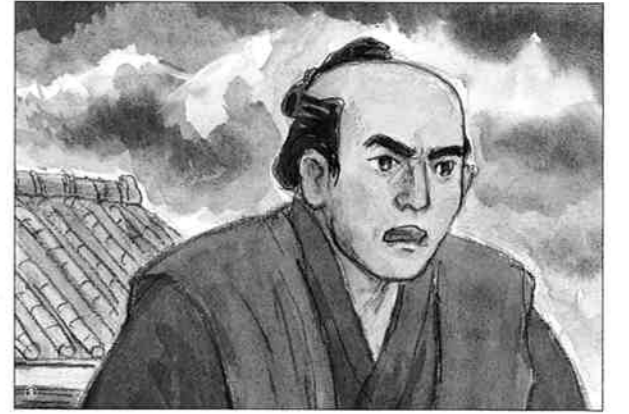
1942年、福岡県に生まれる。虫プロダクション所属
等を経て、フリーの画家になる。日本児童出版美術
家連盟会員。

津波だ！いなむらの火をけすな

2005年3月25日発行

16画面

監修 内閣府(防災担当)
編集・発行 (財)都市防災研究所
東京都千代田区丸の内1-4-2
東銀ビル5階526 (〒100-0005)
TEL 03-5218-0880
http://www.udri.net
企画 幸田真希(聖徳大学短期大学部教授)
児島正(株式会社損保ジャパン)
編集協力 山下真里子
製版・印刷 小宮山印刷株式会社



③

ひろむら 広村をおさめる庄屋として、むらびと 村人に
したわれている浜口儀兵衛も、かぞく 家族と
いっしょに家の外に出ました。

儀兵衛 「わが家は、だいじょうぶだが、

むらびと 村人たちは、無事だろうか……。」

そら 空には、黒い雲と白い雲とが、あやしく
い 入りまじって広がり、とおく 遠くの雲を
き 切りさくように、するどい光が走りまわりました。

しかも、その遠い海のむこうから、

ドドン ドドン ドドン

たいほう 大砲がとどろくような音が、き 聞こえて

きたのでした。

儀兵衛

「これは、おそろしいことになる……。」

—三分の一ぬく—

儀兵衛 儀兵衛は家族に、

「いますぐ、おか 丘の上、いっほんまつ 一本松から

ひろはちまんじんじや 広八幡神社のほうへ、ひなんしなさい。」

—残りを全部ぬきながら—

と命じて、じぶん 自分は家の中に入りました。

演出ノート

庄屋 江戸時代に領主に命じられ、村を治める仕事をした者。

津波の前兆

不安そうにつぶやく

きつぱりと

津波だ！ いなむらの火をけすな



儀兵衛の妻

「何をなさるのでですか。」

儀兵衛は、たいまつに火をつけながら、

「津波だ。」

まもなく、津波がおしよせてくる。

村じゆうに、危険を知らせて歩く

間はない。

田んぼのいなむらに、火をつけて、

合図するのだ。」

—さつとぬく—

④

演出ノート

おどろいて



⑤

儀兵衛は、走りました。

いなむらのひとつに、火をつけます。

よくかわいているいなむらは、ぽつと

燃え上がりました。

—半分ぬく—

次から次へ、次の田んぼへ。

儀兵衛は、走って走って……。

「みんな、早く集まってこいよ。

そして、丘へひなんするのだ。」

—全部ぬく—



⑥

村人① 「庄屋さまの所が、火事だぞ。」

村人② 「庄屋さまに、何かあったら大変だ。」

村人③ 「それ、火をけしにいけ。」

村人たちが、すぐさま、集まってきました。

こんな時には、村じゅうひとり残らず、

火けしに、加わることになっていたので。

若者たち 「ぬきながらー

「庄屋さまあ。」

演出ノート

あわてて

さげび声



⑦

まっ先さきにやってきた若者わかものたちが、火ひを

けそうとすると、儀兵衛ぎへえがおしとどめました。

儀兵衛ぎへえ

「津波つなみだ！ いなむらの火ひをけすな。」

若者わかものたち

「庄屋しょうやさま！ どうしてですか。」

儀兵衛ぎへえ

「津波つなみだ。津波つなみがくる。」

村むらのみんなが、集あつまってきたかどうか、

たしかめるのだ。

そして、一本松いっほんまつから、

ひろはちまんじんじや
広八幡神社ひろはちまんじんじやのほうへ、

みんなをひなんさせるのだ。」

若者わかものたち

「はい、庄屋しょうやさま。」

— 少しずつぬきながら —

こうして村人むらびとたちが、高たかい所ところに

ひなんした時とき、

儀兵衛ぎへえ

「あれを見ろ！」

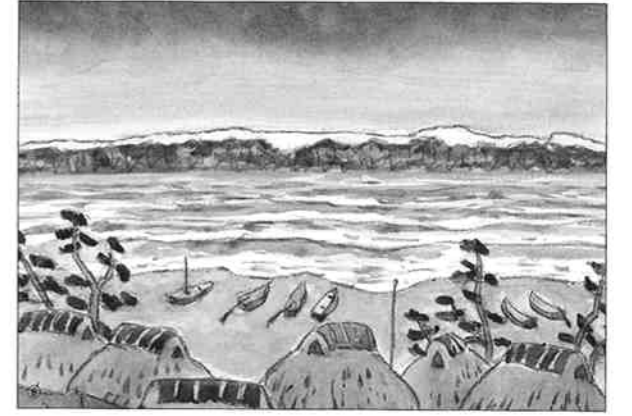
— さっとぬく —

演出ノート

必死にとめる

訳がわからず

大きな声で



⑧

儀兵衛が、海のむこうを指さしました。

村人たち 「なんだろう！」

村人たちは、おそろしいものを見ました。

まさに、暗くなりかけた沖の海に、

長く黒い帯が広がり、

こちらに、ぐんぐんせまってきます。

どどどどうん

村人① 「津波だ！」

村人② 「津波がくる！」

ーぬきながらー

ぐううおーん

演出ノート

黒い帯
この津波は、
夕方の逆光で
黒く見えてい
たが、一般に
は波頭が白く
見える。

大津波がせまる音

さげび声

村が波にのみこ
まれていく音



⑨

人々は、思わず身ぶるいしました。

海辺の村が、水けむりとともに、津波に
おそわれたのです。

村のすべてのものが、さかまく波に
のみこまれ、すがたを失っていきました。

(少しの間)

つい先ほどまで、津波がくることを

知らずに、あそこにいたのだと、村人たちは
気づきました。

村人たち 「おう、おそろしいことだ。」

時をおいて、津波は二度、三度と、
おそつてきました。

ーぬくー



⑩

村人①たちは、ずらりと、儀兵衛の前に

ひざまずいて、頭を下げました。

村人①

「おかげさまで、命が助かりました。」

村人②

「庄屋さん、ありがとうございます。」

儀兵衛は、うなずきながら、いいました。

儀兵衛

「浜口の家には、

大地震のあとには、津波がくる

という、いい伝えがあつてな。

とつさに、それを思い起こした。

ご先祖さまの、言葉のおかげだ。」

「ぬく」

演出ノート

感謝をこめて

ゆっくりと
さすように



⑪

儀兵衛は、若者たちを引きつれて、

となり村へいき、たくわえ米を

借りてきました。

そして、おかみさんたちが、米をたき、

にぎり飯をつくりました。

儀兵衛

「さあ、これを食べて元気を出さない。」

儀兵衛が、先頭に立って、みんなに配って

歩きました。

「ぬくー」



⑫

やがて、余震が続くなか、

あれはてた村に、いくつもの仮小屋が、
つくられました。

村人たちが、立ち直りの一歩を

ふみだしたのです。

ところが、津波によって、何もかも

失ってしまったある村人は、儀兵衛に、

「もう、広村には、住んでいられません。

働き口をさがしに、よその村へ

うつろうと思います。」

また、ある村人は、

「またいつか、津波がくるかもしれないと

思うと、こわくてなりません。

もつと、安全な所へいきます。」

と、なみだながらに、うったえました。

ーぬくー



13

儀兵衛は、浜辺によせる波を

見つめていました。

天洲ヶ浜と、美しく名づけられたこの浜辺。

「ここに、津波をふせぐ堤防をつくらう。

村人に働いてもらえば、それが

働き口になる。

ふるさとが、よみがえるのだ。」

儀兵衛は、ひとり、うなずきました。

浜口家では、むかしから、銚子で

しょうゆをつくり、江戸で大きな商売を

しています。

「働く人の給料や、堤防づくりのすべての

お金を出すと、大金が必要だが、

なんと少しでも、やりぬこう。」

と、かたく決心しました。

ーぬー

演出ノート

決心して

銚子
現在の千葉県
銚子市。



14

さつそく、工事が始まりました。

儀兵衛が調べたところ、広村は、

ここ五百年の間に、ほぼ百年ごとに、

大津波におそわれていることが、

わかりました。

むかしの津波のようす、こんどの津波の

ようすをもとに、儀兵衛が堤防の設計をし、

工事のさしずをしました。

村人①たちは、よく働きました。

村人②「村を守るために、がんばろう。」

「男も女も、働けば、すぐにお金が

もらえる。

村人③「ありがたい、ありがたい。」

「田畑の仕事が、いそがしくなれば、

工事のほうは、休みになるとか。」

村人④「こんなに、働きがいのあることはない。」

「ぬく」



15

四年の月日、多くの人々の力、それに
大金をかけて、りっぱな堤防が完成しました。

(少しの間)

いなむらの火が燃えた時の、

安政南海地震津波から九十二年後、

昭和南海地震の時には、予想したように、

大きな津波がおそってきました。

しかし、堤防はゆるぐことなく、人々を

津波から守りました。

ーぬくー

防災教育としての「稲むらの火」

1896年、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、日本の神の概念は諸外国のそれとは著しく異なっていることを述べた作品「A Living God」を著しました。その中に、稲むらに火を放って村人を導き、その命を津波から救い、神として祀られた濱口五兵衛という人物の活躍についてのエピソードがあります。また、この作品をもとに、教員であった中井常蔵は文部省（当時）の小学国語読本の公募に応じ、それは「稲むらの火」として、昭和12年から22年まで、読本に掲載されました。濱口梧陵をモデルにしたこの二つの作品によって、津波の危険が防災知識として人々の記憶に残りました。

「地震のあとは津波を心配せよ」、「突然波が引いたら津波を心配せよ」と、防災教訓のエッセンスだけを連呼しても人の記憶に留まる時間は短いでしょう。人々の日常の生活に結びついた防災という位置付けがあつてこそ、防災は前向きな価値を持ちます。この考えは、政府の中央防災会議「民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会」においても繰り返し強調されています。

この紙芝居は、津波後の堤防造りまでの出来事が語られ、住民の手による防災と復興という視点からも、意義のある教材になると言えるでしょう。



16

和歌山県広川町の堤防では、毎年十一月に、

津波まつりがおこなわれます。

①「いなむらの火をわすれません。」

②「堤防づくり、ありがとうございます。」

子どもたちがそれぞれに、一ふくろずつの土を堤防に運び、積み上げていります。

そして、

「みんな、ふるさとを守ります。」

と、防災の心をあらたにするのです。

(おわり)

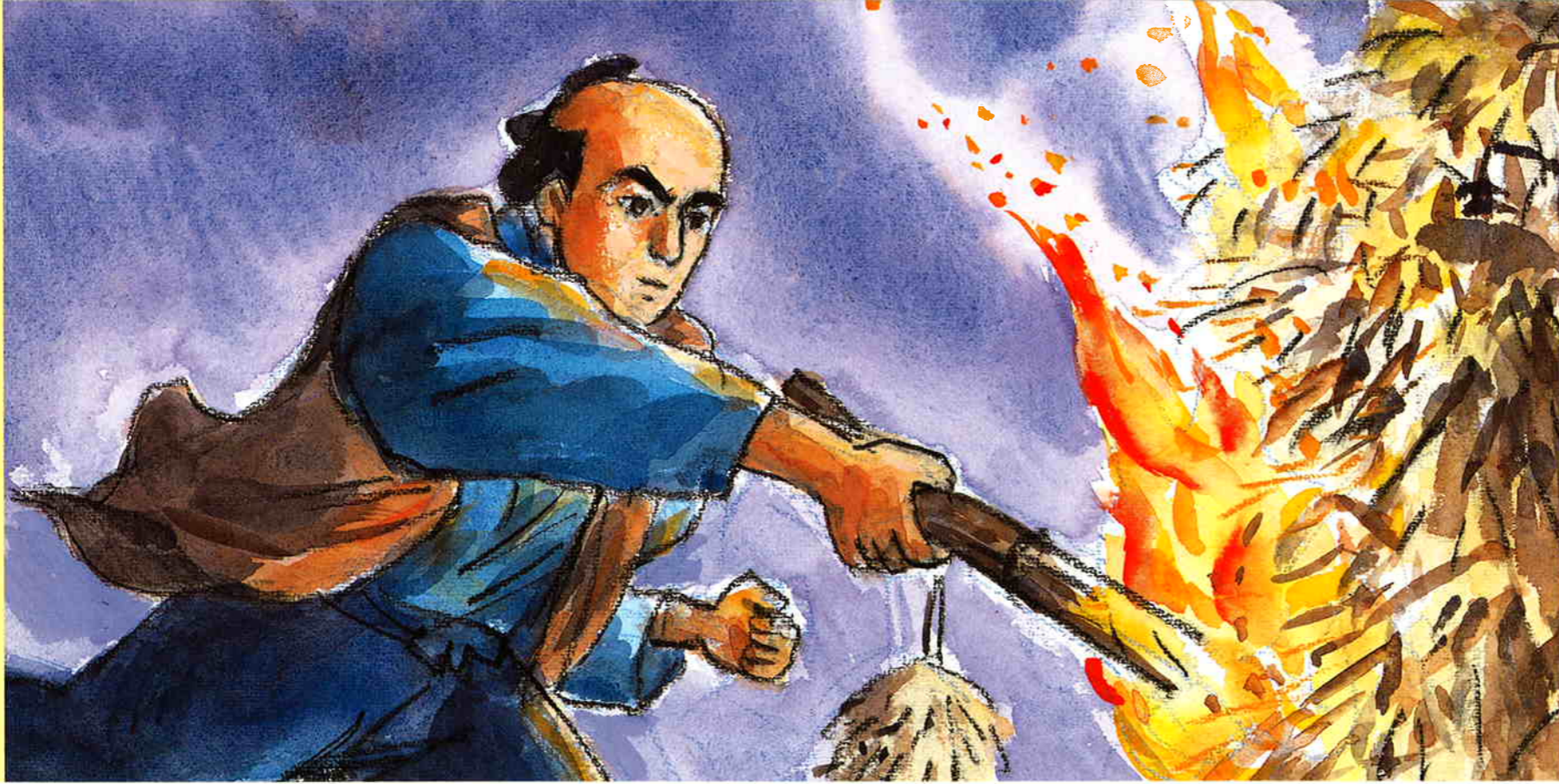
1854年、安政南海地震津波が広村（現在の和歌山県広川町）を襲いました。この大津波が襲った際、濱口梧陵（当時儀兵衛、35才）は暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、「稲むら」に火を放って高台にある広八幡神社の境内に導き、多くの命を救いました。その後、百年後に再来するであろう津波に備え、巨額の私財を投じ、海岸に高さ約5m、長さ約600mの広村堤防（防波堤）を築き、その海側に、大量の松を山から移植し強固なものにしました。約4年間にわたるこの大工事に村人を雇用することで、津波で荒廃した村からの離散を防いだとのこと。

そして92年後、昭和21年に昭和南海地震が発生し、高さ4～5mの大津波が広村を襲いましたが、梧陵が築いた広村堤防は、村の居住地区の大部分を津波から守ったのです。

この紙芝居は、ラフカディオ・ハーンの「A Living God」や中井常蔵の「稲むらの火」を参考にしながら、また防災教育の教材としてこのエピソードが使われることを念頭に置きながら、地震の揺れが激しかったこと、堤防を築いたこと、地元ではいまでも津波まつりを行っていることなど、できるだけ事実に基づくように配慮して編集しました。

作品としての構成の上で、史実と少し異なる部分がありますが、わかりやすい防災の啓発普及教材として活用されることを願っております。

津波だ！いなむらの火をけすな



つなみ
津波だ！いなむらの火をけすな

脚本／桜井信夫 画／藤本四郎
監修／内閣府(防災担当)
編集・発行／(財)都市防災研究所

江戸時代の末、地震による大津波が紀州和歌山の広村（現在の和歌山県広川町）を襲いました。濱口梧陵（当時、儀兵衛）は、稲むらに火をつけて村人を高台に導き、多くの命を救います。その後、私財を費やし、村人と協力して防波堤を造りました。

（16画面）